

忘れえぬ人々

酒井哲哉

私が初めて日文研を訪れたのは、いまから一五年くらい前のことである。当時はまだバス使もまばらで、桂駅前のドーナツ屋さんで待ち時間を潰すこともたびたびあった。バスを下車して坂道を登ると、忽然と、おとぎの国のような建物が現れ、この東西融合様式が国際日本文化研究の殿堂なのか、と妙な関心をした記憶がある。その後、何度か日文研の企画にかかわることになったが、一番思い出深いのは、二〇一〇年度から二年間勤めた客員教授時代の共同研究プロジェクト「帝国と高等教育―東アジアの文脈から」である。一九九〇年代に入って日本近代史研究は大きな転換をとげ、植民地帝国としての戦前期日本が抱えていた問題を、現代的な関心から読み直す作業が進められていた。私自身が編集委員を勤めた『岩波講座・「帝国」日本の学知』も、その潮流のなかにあった。

この岩波講座を編集する過程で気にかかったのは、京城帝大や台北帝大のような植民地大学が果たした役割は何だったのか、という疑問であった。同講座のいくつかの論文はこの問題を新たな視角から扱っており、この延長線上に、帝国日本と植民地大学に関する総合的研究が可能になるのではないかという思いがわいた。同じことを感じた他の方々もいたようで、この主題に関する共同研究会を立ち上げようというふうに話が拡がっていった。幸い、日文研の国内公募共同研究に採択されたことで、極めて恵まれた環境で研究会を行うことができ、海外から

講師を招請することも容易となり、隔月に上洛するのが待ち遠しい、たいへん充実した研究会となった。

研究会を始めるとき、まず気をつけたのは、狭義の教育史研究者に限らず、歴史学・人類学・政治学・法学など、できる限り様々な専門分野の研究者を領域横断的に集めることだった。そして、朝鮮史・台湾史など狭義の植民地史研究者に限らず、植民地を主たる研究対象としてこなかった方にも声掛けしようとも考えた。植民地史は長年の蓄積があるが、各学問分野のなかでは周辺のなものとして位置づけられてきたむきがないとは言えない。だが、およそ近代日本の学知を扱う者ならば、立場の如何を問わずどこかで「帝国」の問題と向き合わざるを得ない、それが常識となるような知的土壌を作りたかった。それこそが、教育史の専門家でもなければ、植民地史研究者でもない私の果たすべき役割だと、思ったのである。各学問分野を代表する研究者からなる二年間の共同研究会を終え、そのうえで、韓国・台湾から主要な研究者を招請し、日文研で国際研究集会を成功裏に開催したことで、万事は整ったかのように思われた。

だが、物事は常に順風満帆とはいかないようで、いざ成果を世に問おうとした瞬間に、思わぬ出来事がおきた。出版を予定していた編集者から、突然、書籍の内容が一貫性を欠いた寄せ集めであり、「植民地的近代」のような社会的要因の分析に偏り、教育史・大学史から逸脱している、全面的に改稿すべきである、といいわたされたのである。確かに、私は教育史の専門家でも植民地史研究者でもない、正直、植民地大学の共同研究代表として力不足だったと思う。だが、私以外の執筆者はいずれも力作の論文を寄稿し、巻末の付録に至るまで、関わった人たちの経験と熱意が伝わるものだった。また、植民地大学を学問対象とする際に、そ

れを取り囲む政治的・社会的状況に言及することは、少なくとも私にはきわめて自然なことのようには思われた。この編集者の方には、こうあってほしい植民地大学史像がおりあったのだらうと推測するが、そもそも歴史的评价が対立する主題を扱う論集だけに、私としては極力各執筆者の立場を尊重しなかった。こうして、出版については、はじめからことをやりなおさなければいけないことになった。

困惑する私をこのとき全面的に支えてくださったのが、松田利彦教授であった。松田教授は、冷静に次の方策を考えてくださり、自ら東京まで出向いて、いくつかの出版社との交渉に立ち会ってくださった。捨てる神あれば拾う神あり、ということと、私たちの企画の意義を理解してくれる出版社も現れた。これまでの研究生活で初めて経験した事柄だっただけに、人の親切さが身に染みてありがたく思った。そして、日文研の華やかな活動の背後には、このようなスタッフの献身的な姿勢があるのだということを実感できたのは、世間知らずの私には本当に勉強になったできごとであった。この場をかりて、関係者に厚く御礼を申し上げます。

一つの組織を三〇年続けることは、やはり大変なことである。あのメルヘン調の建物には、きつとまだまだ知られていない秘話がたくさんあるのだ。だが、よいことも、よくないことも、それぞれ包み込んで歴史にしていけることが明日を生きる大人の知恵だ、と思うのである。

(東京大学教養学部教授)